

親祖先、縁者を尊ぶことは、自分自身を尊ぶことにつながります。感謝の念を新たにすると、心が澄んで美しくなるからです。心の交流を重ねることで、家庭が明るく変容した、N氏の少年時代の回想話を紹介します。

N氏の家に仏壇が置かれるようになったのは、氏が十歳の夏を過ぎた頃でした。

それまで、借家の床の間には何も置かれていませんでした。仏壇が床の間に設置されて以来、N氏の父親が毎晩、ご飯とお茶を供えることが日課となりました。その後、父は正座し両手を合わせ、何かを報告するような勤行（ごんぎょう）を始めたのです。きっかけは、父親が高血圧症と診断され、生活改善を余儀なくされたからでした。

当時は、両親とN氏ら兄弟四人の六人家族でした。サラリーマンの父親の収入では、厳しい生活環境にありました。病に伏すわけにもいかなかった父親は発奮し、日々のウォーキングから始めて、ランニングができるまでになりました。腹筋運動も行ない、体調を整える努力を毎日続けたのです。（他に何かを変えなくてはならない）と想っていたちようどその時、『ここに倫理がある』という書籍を手に入れたのです。それは、倫理研究所発行の月刊誌『新世』の購読者であった妻が持っていたものでした。

その中に、亡き肉親との心の交流を忘れず、墓参りをきちんと行なう人の仕事や家庭がうまくいっていると示され、その理由は次のように記されていました。

9月のテーマ | 親祖先への感謝



## 墓を大事にする心

墓を大事にするということは、親祖先を大切にすることと同じことであるからであります。親祖先を大切にし、そのおかげを思うということは、自身の生命を感謝し、生命をより充実させることにほかなりません。（『ここに倫理がある』丸山竹秋著）

自分の肉体と精神は、親祖先の肉体精神、まさに生命が積み重なったものなのです。だから墓を大切にし、墓参りすることは、わが心を引き締め、自分の生命の靱帯に油をさすような働きになるということです。

また、遠方に墓がある場合、実際には、年に一度の墓参りもなかなか難しいことにも触れています。そうした場合には、親類か、誰か然るべき人に墓の管理を頼み、その人に玉串料（たまぐしりょう）や線香代、花代をことづけるのは、大変ゆかしいことであると書かれてあったのです。

N氏の父は、もともと信心深い人でした。それでも、この文章を目にするまでは、日々の仕事と子育てに忙殺され、亡き両親との心の対話を重ねるなど思いもしなかったのです。その上、転勤の多い仕事で、関東に勤務していたため、故郷の関西には容易に帰れませんでした。そこで、毎晩の勤行と毎月の線香代の送付を始めたのです。

それから家の中が次第に明るくなっていく過程をN氏は、直接的に経験することになります。五年後、父は親会社への栄転が決まり、さらには責任ある部門を任せられ、家庭も安定していったのでした。

N氏は今、父の軌跡をそのままに歩んでいます。